

わたしのいいなあを、みんなのいいなあに

Artist

内 奈都美 UCHI Natsumi

筑波大学芸術専門学群
デザイン専攻プロダクトデザイン領域 4 年

Writer

辻 真理子 TSUJI Mariko

筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻芸術支援コース 4 年

このお話の主役は、内奈都美。彼女はプロダクトデザインを学ぶ 4 年生。高校時代、演劇部のみんなから「頭の形がタマゴじゃ！ご利益があるかもしれん〜！」と頭を撫でられた時からずっと、「タマちゃん」と呼ばれてきた。華奢で黒髪のポプヘアーが良く似合う、温和な女の子だ。

尾道市の良さを、知らない人にも知ってもらいたいなあ

タマちゃんは広島県尾道市生まれ。中学生の時初めて尾道を出て、お隣のちょっと都会な福山市の学校に通うことになった。福山には、マクドナルドや映画館、お洒落な服屋さんという都会的なお店がたくさん並んでいるから、毎日楽しく学校に通っていた。一方、尾道市は、昭和時代からの商店が連なり、お魚屋さんやお豆腐屋さんを通り売り歩くような、昔から変わらない情景だった。でも、お饅頭屋さんでお買い物をするれば、「いっこおまけしておいたよー！」とおまけをく

れる等、尾道にしかない良いところがいっぱいあることに、タマちゃんは気がついていました。

だから、中学校の自由研究で「尾道には寺と坂しかないって言う人たちに、尾道の良さを知ってもらいたいなあ」と思い、『尾道ガイドブック』を作ることにした。改めて、商店街のお店を一軒一軒まわり、まちの人たちから話を聞き、地図を描いて写真を切って貼って、お店の特徴を書いて、ガイドブックを完成させた。ガイドブックを同級生や先生に見てもらったことがきっかけになって、今度は、学校の廊下で展示をしたりみんなの前で発表をしたりして、学校の中に着々と『尾道ファン』を獲得した。タマちゃんはこうして、人に良いものを共感してもらえ、面白さを知り、自分が作る作品がもつ力に気がついたのだった。

なんでそのプレゼントをその人にあげたのか

高校生になったタマちゃんは、友だちのお誕生日前には「買ったものだと、田舎

だからたいしたもの売ってないし、いまいちやなあ」と思い、プレゼントを手作りすることになっていた。ストールやカバン、ポーチ、髪ゴムといったものを、布を縫ったり編み物をしたりして可愛く作り、ラッピングもトレーシングペーパーにカラー印刷をしたり、出来る限りの技術を使って必死に凝ったものに仕上げた。高校 1 年生の時に親友にプレゼントしたヘアゴムは、今でも大切に使ってもらえていて、タマちゃんはそれを見るたび、「本当に喜んでくれてたんじゃなあ」と、嬉しくなるといふ。

高校生活を楽しんだタマちゃんも、大学受験のことを考え始めた。お父さんお母さんは、「国公立の大学じゃないと駄目。浪人は絶対に許さん」と言っていたし、タマちゃん自身は、「デザインとかそういう先端的なものってやっぱり東京に近いほうがいいよなあ」と思っていた。そこで、関東にある筑波大学を調べたところ、「筑波は AC 入試（アドミッションセンター入試）と推薦と一般の 3 回も受験できるじゃないか！」と気付き、オープンキャンパスに行くことに。そこで、Art Design Produce(ADP) という授業のアスパラガスというチームが行っている、大学病院内でのアートプロジェクトに出会った。ただ作品を作るのではなくて、誰かのためになったり、身近な幸せを見つけて形にしたり。そんな活動に惹かれたタマちゃんは、筑波大学の芸術専門学群デザイン専攻に入学することに決めた。

そこからタマちゃんは、AC 入試のためにポートフォリオを作り始めた。でも、

デッサンが苦手だったタマちゃんに、画塾の先生も「お前はどこも受かるとこなんかない！」と言っていた。だからタマちゃんは、デッサンはポートフォリオの最後のほうに小さく数枚載せ、代わりに、中学生の時に作った尾道のガイドブックや高校生の時に友だちにあげた手作りプレゼントのを中心にすることにした。なにを考えてガイドブックを作ったか、なんでそのプレゼントをその人にあげたのか等の説明文をつけて仕上げたのだ。

そんな山あり谷ありの受験で、タマちゃんは筑波大学芸術専門学群に一発合格した。

みんなが知ったら、大量生産の安いものでももっと大事に使えるようになるんじゃないかな

念願の筑波大学に入学したタマちゃん。病院で働くお父さんの姿を見て育ち、友だちやお婆ちゃんのお見舞いに足を運んでいたタマちゃんにとって、病院は身近な存在だった。でも、「病は気からっていうけど、病院って病気を治す場所なのに、こんな薄暗かったら気分まで落ち込むよなあ」とずっと思っていた。芸術専門学群 ADP のアスパラガスは、アートで病棟の雰囲気を良くしていこうと筑波大学附属病院で活動している。タマちゃんは、



《ホスピタウンのメリークリスマス》
ADP 筑波大学附属病院にて（2010 年）

そのグループに入って、病院に居るお医者さんや入院している患者さんたちと一緒に、病院でお洒落なものを作ったり、病棟を飾ったり、いろんなワークショップを実行した。「こういうのを自分でやるようになって、地元の病院でも同じようなことができれば、入院しとる人らも喜ぶんじゃないかなあって思いながらずっとやってきとったなあ」。タマちゃんは、自分が作り出す物ごとによって人の行動や感情を変えられることを実感して、本当に嬉しかったという。

プロダクトデザイン領域のタマちゃんは、初めての授業で、紙コップの製図を描いた。紙コップなんて、普段は別段気にして見たりはしない。でも、製図をするために、寸法や口に当たるカーブの角度など、初めて意識して一つ一つを見たり測ったりした。そうしてタマちゃんは、「紙コップ一個でも、作るために何人もの人の力が関わっていて、色んなことを考えて作られとるんじゃないかな」と悟り、「そういうことをみんなが知ったら、良いものは勿論、大量生産の安いものとかでも、もっと大事に使えるようになるんじゃないかな」と考えた。こうして、プロダクトデザインというものの作りの専門領域に入ったけれど、ものの大切さを伝えることの方がしたいかもしれないと、タマちゃんはこの頃から漠然と思い始めていた。

このすごいじゃん！っていう物ごとを伝える仕事したい

ある時、地域に密着した活動を行っている蓮見孝先生に連れられ、水戸の本町にある「ピョン太文庫（※1）」に行った。そこは、その地域の近隣に住む人たちが好

きなときに集って好きなことが出来る、小さな公民館のような場所。「茨城って、都会っぽいつくばしか知らなかったけど、この辺りの、民家がギュッといっぱい並んで、おじいちゃんおばあちゃんが世話焼いて優しくしてくれる商店街に、尾道に近いものを感じたんよね。ピョン太文庫にある本は楽しいし、映画も古いけど今のと違って面白いし、周りの八百屋さんとか味噌屋さんとかの雰囲気が本当に好き。こんな良いところを発見できたのが嬉しかったし、『茨城なんかなんもないよー！』って言うてる地元の人たちにもこういう場所をもっと見て欲しい！って思ったんよ」。タマちゃんはその頃、茨城県のもの作りにも興味を持ち始めた。蓮見先生に『いばらきデザインセレクション（※2）』のカタログを見せてもらったタマちゃんは、「す、すごい！茨城でこんな凄いもの作られてるんやなあ！」と、いつしかデザインセレクションのファンになっていた。そのセレクションをまとめている茨城県デザインセンターでインターンをしたとき、茨城で頑張っているクラフトデザイナーや農家の人たちに出会い、たくさん話を聞いたタマちゃん。「このすごいじゃん！っていう物ごとを伝える仕事したいって思ったなあ。けど、伝えるためには、今の自分ではなんも出来んし、伝える為のツールを持ってないと駄目っていうのも気付いたから、やっぱり広告とか出版とかそういうところで早くしっかり勉強したいと思って。大学は 4 年で出ようって決めたんよね」と教えてくれた。

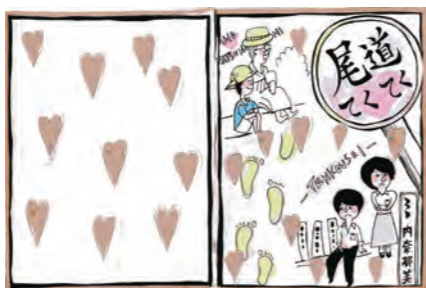
そんなタマちゃんは来春から、水戸の広告会社で働くことになっている。

※1
ピョン太文庫
蓮見孝先生が電動自転車を使って地域活性化を図った際に、拠点とした場所。水戸の本町に所在。

※2
いばらきデザインセレクション
蓮見先生が審査委員長を務めるプロジェクト。茨城県がデザインを積極的に活用した商品や活動を選定するセレクション。いばらきブランドを育成し、地域産業の発展を後押しする目的がある。「いばらきデザインフェア」の一環として開催される。



内奈都美《ポートフォリオ》2012 年 より



《おのみちてくてく》2004 年
紙、色鉛筆、ペン